

Eureka XIII

六年制通信 No.32 令和8年1月16日(金)号

思考実験ふたたび

トロッコ問題を紹介したのは何年前でしたか。あれから折に触れ、何度も考えています。これはイギリスの哲学者フィリップ・フットが考案したのですが、「白熱教室」で有名なハーバード大学のマイケル・サンデル教授のおかげで日本でも広く知られるようになりました。「白熱教室」は本になっていますので、図書館に入れておきましたよ。扱っているのはトロッコ問題だけではないので手に取ってみて下さい。

トロッコ問題:あなたは路面電車の運転手です。すると突然、前方に五人の作業員の姿が目に入ります。慌ててブレーキをかけるが、なぜか全く効かない。しかし、よく見ると、右手に待避線があり、ハンドルを切ればそちらに回避することが出来る。ただし、そちらには線路を渡っている人が一人いる。このまままっすぐ行けば五人の命を奪ってしまう。それを回避しようとしてハンドルを切れば、自らの手で一人の命を奪うことになる。

さあ、あなたならどうするだろうか。

さて、改めて考えてみて下さい。多くの人は五人の命を助けるという選択をするようです。やはり多数を助けるという判断は、正しい気がしますから。いや、自分ならハンドルを切らないと考える人は、たとえ人数が少なくとも自分の行為を加えることで誰かの命を奪うのは嫌だというのですが、これもなるほどと思えます。偶発的なこと (accident) は自分の力が及ばないから仕方ないと考えられるが、意図的な行動 (intention) の結果は負いたくない、これも多くの人の賛同を得そうです。

さて、トロッコ問題は単純に「数」だけの問題で終わりません。例えば、あなたがトロッコの前に飛び降りて、車輪に巻き込まれ脱線させれば誰も死なせなくてすむとします。ただしあなたは死にます。三浦綾子の『塩狩峠』の主人公ですね。彼は列車の乗客を助けるために自分を投げだします。そんなことが、あなたにできるでしょうか。今、反射的に「そんなことは無理だ」と多くの人は考えたのではないのでしょうか。では、トロッコの前にいる人が君の愛する人だったらどうでしょう。考えてみて下さい。曾野綾子は『誰のために愛するか』で、その人を愛しているかどうかは、その人のために死ぬるかというのが踏み絵になると言っています。君ならどう考えますか。

また、「数」の問題から「どんな人」かに問題を変えていくとそう簡単に五人を助けると答えられなくなってきます。五人はどんな人か、一人はどんな人か、様々なバリエーションを考えて思考実験をしてみると、私たちは知らず知らず「命の優先順位」のようなものをつけている、しかも非常に個人的なバイアス (bias: かたより、ゆがみ) をかけていることに気づきます。五人と一人に具体的な人物像を当てはめると、答

えが揺れてくるのがわかると思います。五人が死刑囚、一人が赤ちゃん。五人が園児、一人が杖をついた老人。五人が若い男性、一人が赤ちゃんを抱いた老婆。五人が若い女性、一人が君の祖父。五人が外国人、一人が日本人。五人が他人、一人が知り合い。五人が知らない人、一人は知らない人だけど君と同じ制服を着ている生徒。

知らない人よりは自分の身近な人を、老人よりは若い人を助けようとする傾向があるようです。身内を助けようとするのが人間として当然であることは、実は孔子も言っています。『論語』の「子路第十三」にこんな話があります。葉公が孔子に自慢するのですね。私の村には正直者の窮という人物がいます。すなわち、父親が羊を盗んだときに、子である窮が証人に立ったほどであると。しかし孔子は、自分の村の正直者は違う、父親は子どもをかばって隠してやるし、子どもは父親をかばって隠します。その不正直さの中にこそ、本当の正直さがあるように思います、と答えます。何か事件があっても家族の証言が取り上げられないというのは、なるほどですね。

思考実験は、年齢によっても答えが変わるのではないかと思います。君と私では答えが違ってくることもあると思います。年齢を重ねるほど即答できなくなってくる、そんな気がします。ですから、トロッコ問題に限らず同じ思考実験を 20代 30代 40代 50代と続けていけば、自分の精神の変化がわかるのではないかと思いますよ。

今週のおすすめ

・下村敦史 『緑の窓口』 (講談社文庫)

役所職員の天野と先輩の岩波は樹木のトラブルを扱う部署「緑の窓口」に配置転換される。彼らは、人よりも樹木を愛する樹木医の柊紅葉(ひいらぎくれは)を頼りにさまざまな依頼を解決していく、といったストーリーです。登場する樹木はスギ、クヌギ、モッコク、ソメイヨシノ、チャボヒバ、エドヒガンです。みなさん、わかりますか、どんな木か。私は、スギですらあやしいかも。

柊さんも天野、岩波の両名も個性的だが愛すべき人物設定で、魅力的に描かれています。私、こういう連作短編集が大好きです。前に人よりも動物を愛する「警視庁いきもの係」シリーズを楽しく読んだ記憶がありますが、あれはドラマにもなりました。今回もドラマにしてくれないかな。キャストを考えるだけで楽しいですね。

樹木、というか植物全般に私は知識がなくて、それが学生時代のコンプレックスでした。今もですけどね。私の先生は植物全般にお詳しくてね。「君、これ何という木か知っているかね」「いえ、すみません。知りません」、何度こんな会話があったことか。先生の高弟の一人が先生の追悼文集にこんなエピソードを書かれています。お二人で京都の吉田二本松通りを歩きながら東の方を見ると、吉田神社南参道の鳥居あたりの木に紅い花が咲いているのに気づかれるわけ。「百日紅かな」、「夾竹桃ではないでしょうか」という会話があってお二人で確かめに行かれると、二種の木が植わっていたとのこと。こういう会話が私にはできなかつた。先生は私の無知を咎めだてはされませんでした。恥ずかしい思いは今でも残っています。

BGMは メリー・ホプキンの 悲しき天使 でした…。